

「祈るときには」(ルカ一章一〇節)

1 主の祈り

「主の祈り」として今日教会で用いられている祈りの、そもその起こりが今日の箇所(ルカ一章一〇節)に記されています。

今日の日曜日は教会の暦では、祈れという主題をもった主日です。先週は歌う教会が、今週は祈る教会が主題です。教会は賛美し、歌う教会として、また祈る教会として世に遣わされており、世に存在しています。

祈る教会の祈りを導くのは主の祈りです。祈る教会がつねに立ち帰るのも主の祈りです。

主の祈り、主とは、いうまでもなくイエス・キリストです。イエス・キリストの祈りです。イエスが祈っていた祈りでもあり、イエスによって教えられて、教会が、私どもが今日まで祈ってきた祈りです。カトリックもプロテスタントも同じ祈りを祈っています。また外国の人と一緒に、英語や日本語、それぞれの言語でバラバラに唱えても終わるのはだいたい同じです。(当たり前で、不思議でも何でもないけれど)、同じ祈りを祈っている感が増します。

主の祈りは礼拝でも用いられます。プロテスタント教会をつくった宗教改革者のカルヴァン、彼は、われわれの霊的集会で守るようにイエス・キリストが命じたのは三つ、御言葉の説教、公同公式の祈禱そして、聖礼典の執行、この三つだといっています(礼拝式文、一五四二年)。私どもの礼拝でも応答の祈り、そして感謝の祈りがささげられ、それにつづいて主の祈りがとなえられます。これらはまさにカルヴァンの要求した公同・公式の祈禱に当たります。

昔、中高のキリスト教学校の礼拝に招かれて、主の祈りをとなえるのが早くて、びつくりしたことがあります。若さです。うらやましいぐらいでした。でもゆっくり唱えるのも悪くはない。多くの方が諳んじることができるわけですが、本文を見ながらゆっくり祈るのもいいと思います。

ところで主の祈りというのは、これはもちろん祈りですけれども、私どもの生活の手引きという面をもっていることにも注意したいと思います。

今日はその点から主の祈りの話をするにはできませんが、信仰生活の手引きとして代表的なものは十戒と主の祈りです。十戒は旧約の律法ですが、今も私どもが耳を傾けなければならぬ神の言葉、誠めです。主の祈りも、誠めではありませんが、十戒と同じく手引き、倫理の規範となります。神を神とすること、その上で私ども自身が感謝のうちに生活すること、またお互いのあいだで赦し合って生きること、そうした信仰生活の手引きとなるものです。

イエス・キリストの十字架と復活によって私どもの罪があがなわれた。その恵みの事実にもはただ信仰によって、言い換えれば、イエス・キリストの救いをそのまま感謝して受け入れることによって、だれにも新たな人生が開かれます。こうして開かれた人生をしっかりと生きていく、この世の、もろもろの誘惑と困難の中にあっても生き抜く、生き抜かなければならない、そのための手引き、それが主の祈りです。主

の祈りは、あくまで祈りですが、そうした役割、側面をもっていることを忘れないようにしたいと思います。

2 父よ!

今日の聖書箇所は主の祈りの由来を伝えているところだと申しました。教会はその歩みの中で、これを祈りとして整え、用いてきました。主の祈りの起こり、由来を伝えているのは、マタイによる福音書六章と、今日のルカによる福音書十一章の二箇所です。ルカはマタイより少し短い形で伝えています。

イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた・・・(一～二節)。

これによると、弟子たちは、イエスの祈る姿を見て、それに触れて、祈りを教えてくださいと願っています。弟子たちのほうから願っています(マタイにはない)。それは師であるイエスにとってどれほど喜ばしいことであつたでしょうか。こうしたところに現れ出ているイエスと弟子の師弟関係は、何かうらやましいような率直さと信頼とに満ちています。

そこでこうして教えられた主の祈りには、イエスの息吹といったものが込められているように思います。主の祈りによって私どもはイエスの思いにじかに触れることになるのです。それゆえ今日のはじめに教会の祈りを導くのは主の祈りであり、祈る教会がつねに立ち帰るのも主の祈りであると申し上げたわけです。

ところでイエスの弟子たちがイエスに祈りを教えてくれるように願い出た一つのきっかけは、ヨハネ、すなわち、バプテスマのヨハネの弟子たちも彼らの祈りをもっていただくことができました。じっさい当時、ユダヤ教にも決まった祈りがあり、またその指導者(ラビ)たちは自分のグループを他のグループから区別するために独自の祈りをもっていたようです。

ですからここで弟子たちが「わたしたちにも」といっているところに、イエスをメシア(キリスト)とする自分たちが独自の群れであることを、きわめてはっきりと自覚していたことがわかります。それならイエスの群れの、祈りにおける特別な点はどこにあるのでしょうか。

祈るときには、こう言いなさい。「父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を、皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください」(二～四節)。

バプテスマのヨハネのグループの祈りがどういうものであつたか、はっきりした資料があるか私は知りません(五・三三参照)。ただ当時のユダヤ教の祈りはよく知ら

れています。ヨハネのグループもその範囲に入ると考えて、これらのユダヤ教の祈りと主の祈りを比べてみると、重なる部分は多くあります。しかし一番大きな違いは神を父よと呼びかけているところにあるようです。今日は、ただこの「父よ」という呼びかけだけを取り上げたいと思います。

一般に、他の宗教にくらべて、キリスト教の祈りの特色は、祈っている、呼びかけている相手はつきりしていることだといわれます。日本の宗教ではあまりはつきりしていません。神も仏も一緒です。仮に祈りを向けている方がはつきりしているとしても、一人の神様だけでは足らず（力不足を感じて？）、たくさんの方を呼び出したりします。

しかし私どもの神は世界をおつくりになり、それを統べ治め、イエス・キリストによつて私どもの罪をあがない、一人ひとりに聖霊をたまわり、それによつて救い、きよめてくださるただひとりの神です。一言でいえば、私どもの神とは、イエス・キリストの父なる神にほかなりません。

この神を父と呼ぶことは旧約聖書にあります（申命記三二・六、イザヤ書六三・一六）。ですから主の祈りで神を父とするのは広い意味で旧約聖書から来ています。この場合父というのは、何か血縁上の直接の父というのではなく、神を父とする大きな家族関係の中にあるというような意味です。

しかしイエスにとつて、神を父と呼ぶことは、そのように一人のユダヤ人として知っている、そうした一般的なことにすぎないではありませんでした。イエスは、ふだんの生活の中で、神を父よ、わが父よ、と親しく呼びかけていました。遠くにある方ではなく、近くにいる方、ともにいる方として呼びかけたのです。時にゲッセマネの園のように苦しい状態の中でも、わが父よ、と呼んでいたのです。なぜそうなのか、イエスご自身がその秘密を語っています。

すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかに、だれもいません（一〇・二二）。

まさにこの通りなのです。イエスはそれゆえ神を父と呼ぶのです。イエスだけが父と呼ぶことができるのです。

さて私どもも神を父と呼んでいいのでしょうか。私どもはユダヤ人でもありませんし、そもそも人間は被造物にすぎず、観念的にも神から生まれたとはいえない存在です。しかるにそういう私どもに対してイエスは、主の祈りで、私どもも、父よ、と呼べ、われらの父よと呼んでいいというのです。そこには許しがあり、過分の恵みがあり、まことの神を父とする群れへの招きがあるのです。

3 聞き届けて下さる神

神を父と呼ぶとは、どういうことでしょうか。今日の聖書箇所は、五〜八節で、一つの譬えとその解説によつてそれを明らかにしています。

あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったでしょう。「友よ、パンを三つ貸してください。旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです」。すると、その人は家の中から答えるにちがいない。「面倒をかけないでください。もう戸は閉めたとし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません」。しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう（五〜八節）。

この中の最後の一節、八節「しかし、言っておく」以下の言葉は、譬えの結論、いわばイエスによるコメント、解説です。

「あなたがたのうちのだれかに友達がいて」。私どものこととして、どうぞ想像してみてください。急な来客があった。迎えて上げたい。もてなしたい。しかし今何もない。そこで友達のところに行つて、この場合は絶対に断ることのない人のところに行つて、パンをもらおう、借りようと思つます。しかし状況を考えてもみてください。なるほど友達はずぶ近所に住んでいる人です。この友達は子供も一部屋と一緒に寝ているように貧しい家ようです。何より真夜中です。

この話は、これを聞いた弟子たちが、みな、断られるな、それは無理だよ、と考えた話なのです。

しかし結末はどうだったのでしょうか。友達は最後は起きてきてパンを与えたのです。必要なものを与えた。「しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう」。これは一つの経過説明です。「しつように頼めば」というのを、そうした結末をもたらした条件のようなものと考える必要はないと思つます。熱心にしつようにお願いするのは当然のことだからです。いずれにせよ、最後は、この友達がパンを与えたというのが大事です。これが父なる神なのです。

父のイメージ、人によつて違つてでしょう。厳父という言葉にあるように、厳しさというのが一般のイメージでしょうか。神は母のようであつてほしい、母なる神。それを望む気持ちには日本人にはあると思つます。神を父とするのは、旧約聖書では、神を父とする大きな家族の関係の中にあるというような意味だと申し上げましたが、父であるというのは、自分のほかに、子どもを、妻を、つまり自分だけでなく自分以外の者を自分のことのように配慮し、責任をもつことです。それが父性です。ですから母性とはまた違つて意味で、憐れみ、配慮する神、それが本質です。それが父なる神というものです。

神を私どもは父と呼びかけることを許されています。必要なものを必ず与え、聞き届けてくださる神です。その信頼が祈りです。その確信が祈りです。その確信を内容とする希望、それが祈りなのです。この年も、祈る教会として、ともに歩んでいきましよう。

(二〇一九年五月二六日)